

St. Luke's International University Repository

看護学生による病棟でのボランティア活動報告 -成果と今後の課題-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): nursing students, volunteer activities, clinical practice, questionnaire 作成者: 小林, 万里子, 西野, 理英, 岩崎, 寿賀子, 氏家, 由紀子, 佐居, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/2808

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報告

看護学生による病棟でのボランティア活動報告

— 成果と今後の課題 —

小林万里子¹⁾ 西野 理英¹⁾ 岩崎寿賀子¹⁾ 氏家由紀子¹⁾ 佐居 由美²⁾

Volunteer Activities at Hospital Wards by Nursing Students : Results and Future

Mariko KOBAYASHI, RN ¹⁾ Rie NISHINO, RN ¹⁾ Sugako IWASAKI, RN ¹⁾
 Yukiko UJIKAWA, RN ¹⁾ Yumi SAKYO, RN, MN ²⁾

〔Abstract〕

The activities of the volunteer group “5E Friends” started by nursing students in November 2006 on the 5th floor East ward of St. Luke’s International Hospital has currently spread to the 10th floor East ward as “105 (Ichigo) Friends”. For the purpose of clarifying the results of their activities and future themes, we conducted a questionnaire survey toward students participating in these volunteer activities and 5th floor East ward staff. Student responses included “it is easier for me to imagine patient illnesses and what nursing will involve” and “I have been able to learn how to interrelate with patients”, among other responses. The majority of students surveyed responded that their experiences would help their college courses and would benefit them in the future. Staff members responses included “the student volunteers can respond to aspects of nursing care which staff are unable to cover, such as keeping patients company and attending on patients”, among other responses. Many of the staff wished to see student volunteer activities continue. We surmise that the strengthening of collaboration between nursing education and clinical practice has resulted in mitigating the reality shock experienced by nurses in clinical practice. In the future, it will be necessary to further promote measures to organize a system on the clinical practice side, to set-up volunteer activities according to student academic year.

〔Key words〕 nursing students, volunteer activities, clinical practice, questionnaire

〔要 旨〕

2006年11月から聖路加国際病院5階東病棟にて、看護学生によるボランティア「5Eフレンド」が活動を開始した。現在は「105(いちご)フレンド」として10階東病棟にも活動の場を広げている。この活動の成果と今後の課題について明らかにすることを目的とし、ボランティア活動に参加した学生と5階東病棟スタッフ(看護師・看護助手)双方に質問紙調査を行った。学生からは「疾病や看護のイメージがしやすくなった」「患者との関わりを学べた」等の回答が得られ、大学の授業や今後役に立つとの意見が大半を占めた。スタッフからは「患者の話し相手や付添いなどスタッフでは覆いきれない部分をカバーしてくれる」等の回答が得られ、活動の継続を望む声が多かった。看護教育と臨床現場との連携が深まり、学生の臨床現場におけるリアリティショックの軽減につながったと考える。今後、学年に応じた活動内容の充実に向け、受け入れ側の体制作りを更に進める必要がある。

1) 聖路加国際病院 St. Luke's International Hospital

2) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing

〔キーワード〕 看護学生, ボランティア活動, 臨床現場, アンケート

I. はじめに

聖路加国際病院におけるボランティア活動の歴史は古く、25年以上前にさかのぼり、現在、キリスト教の理念の下、全人的医療を提供していく上で重要な役割を担っている。

2006年11月に活動を開始した聖路加看護大学の学生によるボランティアグループ「5E フレンド」は「私たちは看護学生だけ病棟ってどんな所か知らない」「患者さんと直接ふれあいたい」という学生自身の声から始まった。

当初、聖路加看護大学看護学部1年生10名が整形外科を中心とする5階東病棟で活動を開始した。翌年4月からは「105 (いちご) フレンド」として10階東病棟にもその活動の場を広げ、現在(2008年10月)30名で活動している。これは、看護学生グループが病棟において看護業務に関するボランティアを行うという新たな試みである。

病院ボランティアの調査1999には、「ボランティア活動の振興のためには、ボランティアの動機や意識、活動実態などを調査し、さらにボランティアを受け入れる病院や老人ホームなどの医療福祉機関でボランティア受け入れ体制の整備が重要である」とある。

本研究では、「105フレンド」の活動における成果を振り返るとともに、受け入れ体制の整備に向けての課題を明らかにする目的で、学生と5階東病棟スタッフ(看護師・看護助手)に対し質問紙調査を行ったのでここに報告する。

II. 「105 フレンド」活動について

1. 活動開始までの流れ

2006年10月に学生間で企画され、指導教官を通じて5階東病棟に依頼があった。その後、病棟での受け入れ担当者2名を選出し、ナースマネージャー、アシスタントナースマネージャー、学生代表者と共に活動形態や内容について話し合いを重ねた。

危険時の対処として学生用の保険 Will2 が適用されることを確認し、2006年11月から活動を開始した。

2. 活動内容

週3～4回、昼食や夕食の時間を中心に2時間程度、各シフト2名ずつで食事の配膳・下膳、洗面介助、食事介助、患者の話し相手等を病棟スタッフの依頼、指導の下で行っている。オリエンテーションは学生同士で実施

し、毎月病棟スタッフと学生とでミーティングを持ち、互いの意見や要望を交換している。

III. 調査方法

2006年11月～2008年1月までにボランティア活動に参加した学生25名と5階東病棟スタッフ24名(看護師23名、看護助手1名)に2008年1月14日～23日に以下の項目について、自由記述を中心とする質問紙調査を行った(回収率:学生100%,スタッフ95%)。

1. 学生用

- ①参加理由
- ②参加前に期待していた活動内容
- ③活動中よかったと感じた場面
- ④活動中に困難を感じた場面
- ⑤今後行っていきたい活動内容
- ⑥大学での学びに役立つか?
- ⑦今後役に立つか?
- ⑧今後への意見・要望

2. 病棟スタッフ用

- ①受け入れ前のボランティアへのイメージ
- ②受け入れてよかったと感じた場面
- ③受け入れに困難を感じた場面
- ④今後への意見・要望

得られた回答は、文献を参考にカテゴリ化し単純集計した^{3) 4) 5) 6)}。

倫理的配慮として、質問紙に研究の目的を記載し、得られた結果は本研究以外では使用しないことを説明し、質問紙の提出をもって同意を得たものとした。

IV. 結果

1. 学生用

① 参加理由

患者さんと話したい、触れ合いたいといった「患者とのコミュニケーション」が15件、病棟がどんな所か知りたい、現場の雰囲気を見たいといった「医療現場に関わりたい」が14件と大半を占めた(図1)。

② 参加前に期待していた活動内容

「患者とのコミュニケーション」が10件、清拭・配膳・食事介助などの「看護技術の実践」が13件、「その他」が1件だった(図2)。

表1 学生が良かったと感じた場面(自由記述)

内容(記述件数)	具体的内容(抜粋)
他者との関係形成 (14件)	患者の部屋に行った時、うれしそうに話しかけてくれた。 患者や看護師に名前を覚えてもらった。
施設活動の役割機能 (7件)	実習の前に病院の様子を知ることができた。 看護師の仕事や、職場の雰囲気を知ることができた。
活動の満足感 (7件)	患者や看護師に「ありがとう」と言われた。 看護師から「助かっているよ」との声が聞けた。
学生の自己成長 (7件)	患者と話すとき、変な緊張がなくなった。 コミュニケーションの勉強になった。
看護観への影響 (3件)	動けない人が多いことから、環境整備の大切さを感じた。
対象理解 (2件)	患者の率直な気持ちを学生だからこそ聞くことができた。
社会とのつながりの認識 (1件)	他の職種と関わる機会が持てた。
ボランティアの役割 (1件)	検体の提出、食事データ入力など実習では行わないことができた。

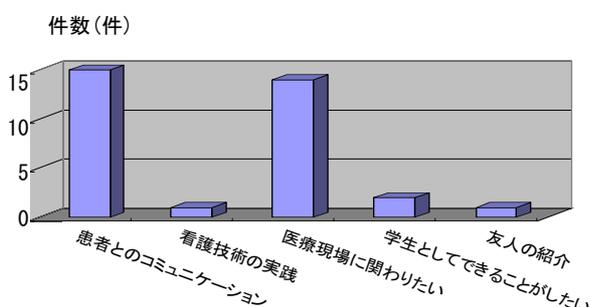


図1 参加理由 (自由記述・複数回答可)

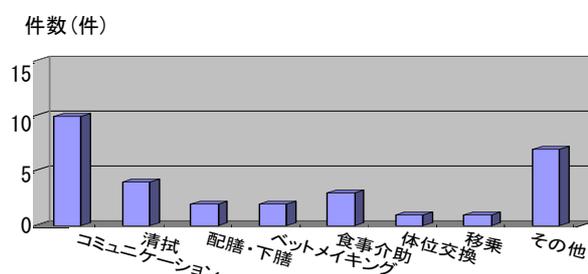


図2 参加前に期待していた活動内容 (自由記述・複数回答可)

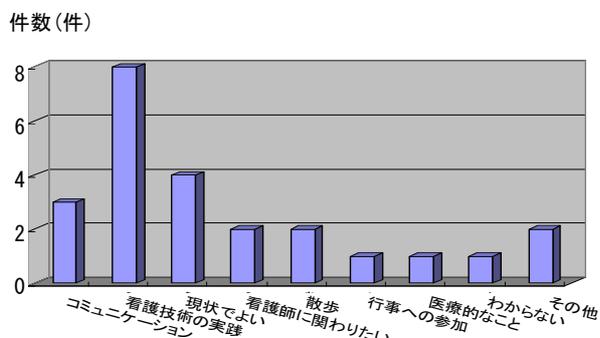


図3 今後行っていきたい活動内容 (自由記述・複数回答可)

③ 活動中よかったと感じた場面

「他者との関係形成」が17件で最も多く、次いで「施設活動の役割機能」「活動の満足感」「学生の自己成長」がそれぞれ7件、「看護観への影響」が3件、「対象理解」が2件、「社会とのつながりの認識」「ボランティアの役割」が1件であった(表1)。

④ 活動中に困難を感じた場面

「他者との関係形成」との意見が大半であり、この項目を更に分類した結果、「スタッフとの関係形成」に困難を感じている意見が多かった。

その他、「役立っている実感が持てない」が6件、「情

報不足」が5件、「知識・技術への不安」が5件、ボランティアの役割が2件であった(表2)。

⑤ 今後行っていきたい活動内容

「看護技術の実践」が8件、「コミュニケーション」は3件、「現状でよい」は4件、「看護に関わりたい」「散歩」が2件、「行事への参加」「医療的なこと」「わからない」が1件、「その他」に「ナースコールに出られるようになりたい」「ボランティアにしかできないことをしたい」があった(図3)。

⑥ 大学での学びに役立つか?

「役立つ」が22名(88%)、「役立たない」が1名(4%)、無回答2名だった(図4)。大学での学びに役立つと思う理由は「病院システムの理解」「疾病・看護ケアの理解」が5件、「意識の向上」が4件、「実習への影響」「コミュニケーション」が3件、「看護技術の実践」が2件、「社会とのつながりの認識」1件であった(表3)。

⑦ 今後役に立つか?

対象者全員が「役立つ」との回答であった(図5)。大学での学びに役立つと思う理由は「病棟との関わり」が13件、「コミュニケーション」が11件、「意識の向上」が8件、「看護技術の実践」が3件だった(表4)。

表2 学生が困難を感じた場面(自由記述)

内容(記述件数)		具体的内容(抜粋)
他者との関係形成	患者との関係形成 (3件)	患者との会話につまった時。 患者にうまく意思伝達ができない。
	スタッフとの関係形成 (8件)	看護師が忙しそうで質問したくてもなかなかきりだせない。 看護師によって指示が異なっていた時。
役立っている実感が持てない (6件)		役立っている実感が持てない。 特にやることがなかった時。
情報不足 (5件)		それぞれの人がどれくらいの援助が必要かわからない時。 患者の年齢, 状況, 認知症の程度などがわかりにくい。
知識・技術への不安 (5件)		話すことが困難な患者とのコミュニケーション。 うまく介助ができなかったときに無力さを感じる。
ボランティアの役割 (2件)		患者から頼まれたとき, 自分では判断ができない。 看護師と間違えられて患者から質問された時。

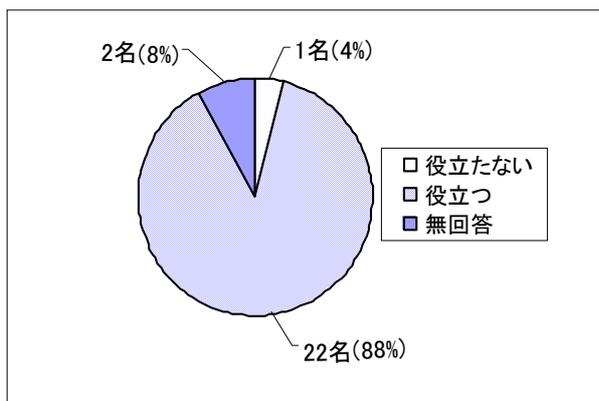


図4 大学での学びに役立つか?

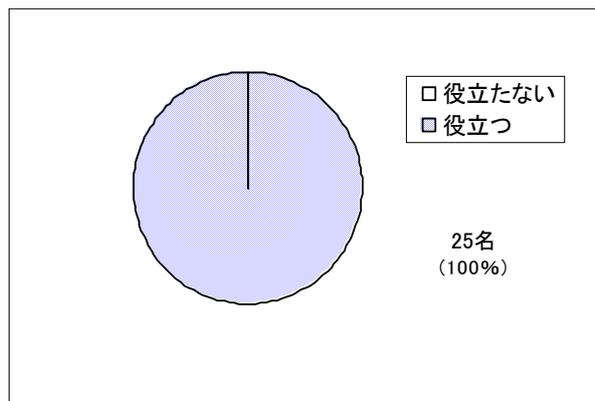


図5 今後の学びに役立つか?

⑧ 今後への意見・要望

25名中2名が回答し,内容は病棟への謝辞であった。

2. 病棟スタッフ用

① 受け入れ前のボランティアへのイメージ

学生の能力や責任の所在等に関する「受け入れに不安」が5件,「わからない」が4件,「患者とのコミュニケーション」「丁寧に仕事をする」「優しい」が3件,「その他」が1件であった(図6)。

② 受け入れてよかったと感じた場面

「看護ケアの質の向上」が7件,「患者への影響」が6件,「業務の負担感軽減」が5件,「他者との関係形成」が3件,「学生への影響」が2件であった(表5)。

③ 受け入れに困難を感じた場面

「情報共有」が6件,この項目を更に分類した結果「患者についての情報共有」が4件,「業務についての情報共有」が2件であった。次いで「スタッフの資質・力量」が5件,「学生との関係形成」が4件,「学生の資質・力量」が2件であった(表6)。

④ 今後への意見・要望

13名から回答を得た。継続を望む「感謝」が7件,オリエンテーションや活動内容についての「提案」が5件,「感想」が1件であった(表7)。

V. 考察

1. 学生がボランティア活動から得たもの

関東地区病院ボランティアの会の調査で,病院ボランティアへの参加理由や動機の上位は「社会貢献」「人生を豊かにする」「勉強」であった^{1), 2)}。

この結果と比較して,今回の調査結果において①参加理由と②参加前で期待していた活動内容の上位が「コミュニケーション」や「看護技術の実践」であったのは,看護学生という立場の特性を反映しているものと思われる。特に,調査対象が本格的な病棟での実習が開始する前の学年であったことから,「105フレンド」の活動を実習に臨む前段階として位置づけた明確な目的意識が背景にうかがえる。また,核家族化が進む現代,学生は高齢者と接する機会が少ない。そのため,看護技術の実践とのコミュニケーションへの期待が大きかったことが考えられる。

「よかった」と感じた場面では,患者や看護師とのコミュニケーションなど「他者との関係形成」,病院や病棟の理解といった「施設活動の役割機能」が多く挙げられており,活動を通じて参加の目的はある程度達成できていると思われる。そして,それらの目的を達成することが,より具体的に疾病や看護を理解し,自身の将来や理

表3 大学での学びに役立つと思う理由（自由記述）

内容(記述件数)	具体的内容(抜粋)
病院システムの理解 (5件)	病棟の流れがわかるので、実習の時動きやすかった。 病院の仕組みがわかる。 物品の位置がわかる。
疾病・看護ケアの理解 (5件)	授業中、プリントやスライドを見ながらイメージが膨らむ。 患者や室内環境など具体的にイメージしやすい。 精神的なケアについて、具体的に考えられるようになった。
意識の向上 (4件)	意識が高まる。モチベーションがあがる。 将来の自分について考える機会を得た。 看護について考えるきっかけになった。
実習への影響 (3件)	実習の時、緊張が緩和した。 実習の時、すんなり馴染めた。度胸がついた。
コミュニケーション (3件)	実際に患者と話すことができた。
看護技術の実践 (2件)	学んだ看護技術が実践できる。
社会とのつながりの認識(1件)	自分の存在価値があるのがうれしい。

表4 今後に役立つと思う理由（自由記述）

内容(記述件数)	具体的内容(抜粋)
病棟との関わり (13件)	どんな形であっても、病棟に関わっていることが大きい。 病棟に慣れるため、座学と臨床とのギャップが少ない。 助手の仕事など、普段とは違う視点で見ることができる。 実際に先輩ナースの働きをみることができる。
コミュニケーション (11件)	実際に患者やその家族に接することができる。 いろいろな人と接することができ、様々な価値観と出会えた。 病気に対する正直な気持ちなど、学生だからこそ教えてくれて、 本当に感じていることを知れた。
意識の向上 (8件)	つねに「看護」を考えるきっかけとなっている。 看護に対するモチベーションが下がらない。
看護技術の実践 (3件)	大学で学んだことを実際に行えた。

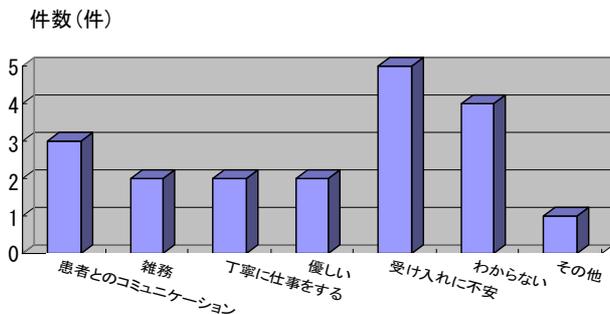


図6 受け入れ前のボランティアへのイメージ (自由記述・複数回答可)

想について常に意識する「意識の向上」につながっているのではないだろうか。

これらのことから、病棟という場で、患者やスタッフとの関係を継続して持つことは、学生にとって、看護に対するモチベーションの維持や、臨床現場でのリアリティシヨックの軽減につながっていると考えられる。

2. 看護スタッフの期待

活動開始前には不安を抱えていたが、受け入れ後は活動を評価し継続を望む意見が多かった。特に、夜勤帯で

人的・時間的な要因から、患者により細やかなケアを提供したいができないジレンマを抱えるスタッフにとって、学生ボランティアの持つサポート力は、その想いを実現する一翼を担い、看護ケアの質の向上を実感させるものとなっていると思われる。

3. 今後に向けて

学生が困難を感じた場面では「スタッフとの関係形成」という意見が多かった。増田らは、「病院ボランティアの意義には、患者への安らぎとしての存在や地域の人々の病院の理解などがある。そして、ボランティア活動は病院の人手不足を補うものではなく、その人の自己実現を達成するためのもので、病院とボランティアは対等な立場のパートナーである」としている⁵⁾。実習では指導にあたる病棟スタッフと看護学生という立場上、このパートナーとしての関係が時に曖昧なものになりがちであるため、随時スタッフへ喚起していかなければならない。

また、学生・スタッフ共に患者や活動内容の「情報共有」に困難を感じていた。スタッフからはオリエンテーションの方法やフィードバックの場を設けることについての提案もされている。末永らは、看護学生のボランテ

表5 病棟スタッフが良かったと感じた場面(自由記述)

内容(記述件数)	具体的内容(抜粋)
看護ケアの質の向上 (7件)	高齢患者、不穏患者の話し相手や付添いなど、スタッフのエンパワーでは覆いきれない部分をカバーしてくれる。
患者への影響 (6件)	食事介助などでゆっくり患者に接しているため、落ち着いているところを見てよかったと思った。看護師はナースコールなどで中断されやすい。 患者の良い話し相手になる(患者の気分転換になる)。
業務の負担感軽減 (5件)	食事介助や配膳など人手の足りないときに大きな助けになる。 夜勤や遅番の時にラウンドがしやすくなった。
他者との関係形成 (3件)	安全を第一に考えている点に共通を感じた。 できないことやわからないことはせず、聞いてくれる姿勢がうれしかった。
学生への影響 (2件)	患者と学生のふれあいの場面が増えた。

表6 病棟スタッフが困難を感じた場面(自由記述)

内容(記述件数)	具体的内容(抜粋)	
情報共有	患者についての情報共有 (4件)	忙しい時は、情報交換をする間がない。 患者の特徴や注意事項を確実に伝えられない。
	業務についての情報共有 (2件)	慣れてくるまで仕事の依頼方法が難しい。 どこまでお願いしていいのか分からない。
スタッフの資質・力量 (5件)	忙しい時に対応する余裕がなく申し訳なく感じる。 はじめのうちは学生に教えるのが大変だった。	
学生との関係形成 (4件)	スタッフ側に、手伝いが増えるというスタンスではなく、協働していくという風潮を作り出していくこと。 スタッフが学生に依存している場面を時々みる。	
学生の資質・力量 (2件)	患者から学生の態度や介助などに不安の声があった。	

表7 今後への意見・要望 (自由記述)

内容(記述件数)	具体的内容(抜粋)
感謝 (7件)	自分が十分に時間をとって接することができていない部分(散歩など)を学生が行ってくれることは患者さんにとってもとてもよいので今後もこの活動を続けてほしい。
提案 (5件)	学年が上がる毎に活動内容を変化させるのもひとつだとは思いますが、様々な活動を模索してください。 新たに活動を開始する人などは、人数が多ければオリエンテーションを一回でまとめて行うとよいと思った。 学生がどのように感じているのか、フィードバックをしてほしい。
感想 (1件)	フレンドで活動している人が実習できたりすると親近感がわきます。

ィア活動への支援として、ボランティアについての積極的な情報提供、学生が活動しやすい時間のコーディネート、ボランティア先の施設職員や学校の教員の励ましが必要、知識・技術の不安については、初期に研修を行い、最低限活動に必要なものを身につける、活動後に体験の意味付けや共有する場を設定することとしている⁴⁾。

これらを踏まえ、今後の課題として、オリエンテーションの見直しやミーティングの充実を図り、互いの意見や方向性を確認し、その時々学生・スタッフのニーズに応じた活動内容へと変化・発展させていく必要があると思われる。

最後に、病院ボランティア活動は近年増加傾向にあり、日本病院ボランティア協会の加盟グループ数は全国で213施設に達している(2008年10月現在)。しかし、ボランティアの参加側、受け入れ側双方への調査は稀であり、この調査結果は、参加者を看護学生に限定せず、病

院ボランティアの受け入れという視点でも、今後に向けてその意義は大きかったと考える。

引用文献

- 1) 安立清史。(1999). 病院ボランティアの調査 1999. 医療・福祉機関におけるボランティア受け入れシステムに関する調査・研究.
http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/~adachi/academic%20articles/Hospital%20Volunteer/vol_hospital_kaken_1999.Pdf [2008-9-22]
- 2) 安立清史。(1998). 関東地区病院ボランティアの会調査結果報告.
http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/~adachi/academic%20articles/Hospital%20Volunteer/vol_hospital_kanto_1996.pdf [2008-9-22]
- 3) 稲垣絹代他。(2002). ボランティア活動が看護学生

の成長過程に及ぼす影響 卒業時の質問紙調査より.
日本看護教育学会誌. 12, 2002, 281.

- 4) 末永香他. (2005). 看護学生のボランティア体験における学びとその支援. 千葉県立衛生短期大学紀要. 24 - 1, 29-37.
- 5) 増田信代. (2005). 病院ボランティア体験実習に対する 2 年課程の看護学生の意識. 神奈川県総合リハビリテーションセンター紀要. 31, 35-43.
- 6) 増田信代. (2005). 2 年課程の看護学生における病院ボランティア体験実習に対する意識. 日本看護学会論

参考文献

- 1) 柿原加代子他. (2005). 看護学生におけるボランティア活動に対する意識の学年比較. 日本赤十字看護学会誌. 5 - 1, 149-154.
- 2) 前田ケイ. (1982). 病院におけるボランティア活動:
病院にボランティアを受け入れるための手引書. 東京ボランティアセンター.
- 3) 松谷美和子他. (2004). 看護教育法としての「サービス・ラーニング」実践研究文献レビュー. 聖路加看護大学紀要. 30, 31-37.
- 4) 内外学生センター, 「学生のボランティア活動に関する調査」現状と課題
- 5) 田代順子他. (2007). 米国におけるサービスラーニング(地域参加型教育)の理念と取り組みーウィスコンシン大学とワシントン大学の視察調査とワークショップ報告ー, 聖路加看護大学紀要. 33, 68-73.
- 6) 横山靖治, 松崎夏美. (2006). ボランティア体験実習への取り組みと学びの現状-看護学生に対しての意識調査結果からの考察-. 神奈川県総合リハビリテーションセンター紀要. 32, 49-53.